

一九六四年度

「英雄たちの大集会」=ニューヨーク=命令する芸術への九州派会合通知提案

久しく感激に飢えていた我々に「英雄たちの大集会」は、奇妙であつたが、死滅しかけた「感激」が、掘り下げれば、まだまだ健在であることを知らせた。しかし、それにしても、九州派自身は「英雄たちの大集会」をするために無理を重ねたので、もう一度、同志に呼びかけ「英雄たちの大集会」を熟させることにして、大集結を計った。結集する下地になり、熟させる核は一九六三年一月二十七日の九州派会合通知で、その時の提案は「一九六四年にニューヨークで”英雄たちの大集会”を開く」だった。これを熟させるのが、そのための十月三日からの東京美目画廊でのグループ展も尖鋭的方法によらず、各人が思い思いに仕事をする事に落ち着いた。何故なら、熟させるためには、先ず作品を完成させることが必要であるからだ。

さて、その一九六四年の提案をみてみよう。

— 一九六二年度の行事「英雄たちの大集会」は色々の問題を内臓したまま、一応成功裏に終つて、わが九州派は一九六三年を迎えた。さて、こんどの九州派は如何にあるべきか、一九六三年は如何に迎えるべきかを整理しながら提案する。

一、

英雄たちの大集会についての評価=九州派としても初めての集会だったが、絵画グループとして出発したものが、展覧会形式を越える情況として、この集会を持つたことは重要なことだ。

A、従来の絵画、即ちタブローでは大衆を魅了する個性を包含することが困難になって来たのだ。我々はタブローを否定するというだけではなく、かつてタブローが持っていた感動的生命力を回復させる手段と、そのために必要な強烈な個性が要求される。従来のタブローは平面であり、それに伴うアカデミックな手法によつてのみ、いわゆる自らが狭めたところの商品化=工芸化で生活のメシを得て来たが、その当然の結果として、感動はなくヤセ細ってしまった。

B. このヤセ細った生活化の厚い壁を見事に破りそうなのが「大会」だったのだ。

C. しかし、このようなことが別になつたわけではない。グループ具体などすでにやっている。それに遠い昔のダダなど。それらはともかく、われわれはタブローに復帰するのではなく、形式の発見より、なにより一番先に[人間が何であるか]を限定し、一歩それを進めて、人間自体を規定する方向へ進路をとっていることは、よくご承知のことと思う。

D、理想的に言えば、新しい生活手段としての「英雄たちの大集会」を開き、運動が生活に変革されてゆくことが願いだ。そのような商品化から遠く離れた距離での基底作業がそう簡単にゆくとは思われないのも、また事実だが、ますます人間規定でゆかざるを得ないのも、また事実だ。